世界のどの地域も夜

It is night in every region of the world

2023年8月24日　まちなかぶんか小屋

世界のどの地域も夜

『NO JAIL CAN CONFINE YOUR POEM　詩の檻はない
～アフガニスタンにおける検閲と芸術の弾圧に対する
詩的抗議』発行記念
二〇二三年八月二十四日　まちなかぶんか小屋（旭川）

主催　Baamdaad（亡命詩人の家）
協力　詩誌「フラジャイル」
後援　旭川市教育委員会

トーク：岡和田晃（文芸評論家）・二条千河（詩人）
・木暮純（詩人）・谷口雅彦（写真家）・日野あかね（漫画家）
・野口壽一（「ウエッブ・アフガン」編集長）
朗読：三木悠莉（動画出演）・元ヤマサキ深ふゆ（動画出演）
・岡和田晃・二条千河・木暮純・柴田望
ラヴァスト演奏：ＳＡＹＯ
司会：柴田望（詩誌「フラジャイル」）

・ご挨拶（柴田望）　皆さんこんにちは。Baamdaad（亡命詩人の家）の日本連絡窓口を担当しております。柴田望と申します。本日はどうぞ宜しくお願い申し上げます。いつも詩誌「フラジャイル」にてお世話になっております。本日、平日のお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。まちな

かぶんか小屋さんの十周年、おめでとうございます。
八月十五日の『詩の檻はない』出版を記念し、「世界のどの地域も夜」をこれよりはじめさせて戴きます。
冒頭は、先日『SLAM ME』という素晴らしいアルバムをリリースされた KOTOBA Slam Japan 運営代表の三木悠莉さんの作品「夜はもう明けているのに」の朗読でした。次の動画は本日のためにソマイア・ラミシュさんからのメッセージ、私たちへの感謝の言葉、二〇二一年八月十五日にアフガニスタンが苦しんでいること、芸術が破壊され、詩が禁じられ、悲劇的な状況の中、国際社会からも忘れられようとしている、自由が尊重されない検閲と弾圧に抵抗するメッセージとして、五十七作品所収の『詩の檻はない』が発行され、十一月にはフランスでも出版。詩の力は心を捉える。暴力に反対し、人間性が解放されますよう、今後もご協力を戴きたいということなどが語られています。そして、「すべての人間が自由になるまで、いかなる人間も自由ではない。」ソマイアさんの詩の朗読動画をご覧戴きました。
『詩の檻はない』、この発行に至った経緯ですが、今年2月、ウエッブ・アフガンの野口編集長からメールを戴き、アフガニスタンからオランダへ亡命されたソマイアさんのことを知りました。タリバン暫定政権が詩作禁止令を一月十五日に発令し、現地でも抗議の声が上がっていること等、日本アフガニスタン協会にもご確認戴きました。「世界の詩人たちへ」、詩を送ってほしいというソマイアさんの訴えに、詩人協会や団体では動けず、個人の活動として、私は最初色んな方に相談したりお声掛けしたのですが、岡和田晃さんと KOTOBA Slam Japan さんが最初に耳を傾けてくださり、助けてくださいました。
当初は作品を、四月十五日に Baamdaad（亡命詩人の家）のウェブサイトに掲載の予定でしたが、素晴らしい作品数多く、フランスで本を出そうという話になり、詩人のセシル・ウムアニさんの編集で、日本の詩は高橋純先生に翻訳して戴き、平行してオランダで三木悠莉さんや柴田の朗読の動画が上映されたり、「フラジャイル」にソマイアさんの作品掲載（木暮純さん訳）など、やりとりが続いていたのですが、六月にソマイアさんから、日本で出版したい、ボランティアで、というメールを戴き、たった二ヶ月しかないですし、普通に出版すると百万円くらいかかりますので、柴田がオンデマンドでの発行を引き受けました。
編集で困っていると、最初に青木由弥子さんがメールで原稿の訂正をくださって、岡和田さん、木暮さん、そして二条千河さんには本当に何度も助けて戴いて、おかげ様で何とか出版レベルになりました。皆さんがいなければ完成できませんでし、匿名でご支援くださっている方もおられます。三十五人の詩人や翻訳の安藤厚先生ともやりとりを経て、原稿に容赦ない赤が次々入り、ずーっと寝ないで編集をやりまして、何とか発行、amazon の詩集の新着ランキングで一位、売れ筋ランキングでも最高五位、本当に皆様、ありがとうございます。この本で得た収益はすべて Baamdaad に寄附させて戴きます。ペルシャ語のＢＢＣ、インデペンデント紙でも報道されました。
私は海外の詩人の方とこんなに深いやりとりをしたのは初めてです。吉増剛造さんや佐川亜紀さんの詩人としての国際的なご活躍は雲の上のことのように思っておりました。一昨年から KOTOBA Slam Japan という世界と繋がる大会に関わらせて戴いたおかげで、ソマイアさんの訴えにも意識を向けることができ

たと思います。よく小熊秀雄賞の最終選考でアーサー・ビナードさんが、「世界文学」という基準で批評をされますが、そういう大切な視点を学ばせて戴きました。

そして、米軍が撤退した後のアフガニスタンに、戦後からずっと米軍が撤退していない日本の私たちが関わるということ、また、五月に津川エリコさんが講演でお話されていましたが、小林多喜二、小熊秀雄、今野大力の時代、戦後もGHQの検閲など、日本にも自由に詩を書けない時代がありました。また、侵略によって先住民族の権利を奪い、価値観を圧しつけた歴史等についても考えますと、日本とアフガニスタンの状況は他人ごとではなく、実はあらゆる要素が非常に複雑な構造で密接に絡み合っているように感じます。

最近、性犯罪、被害、二次被害、差別といったことが日本でも議論されていますが、アフガニスタンでは女性の権利が絶望的な程に奪われ、家畜のように扱われようとし、女性用の刑務所が新たに建設されている状況も、犯罪的な人権問題と思います。アフガニスタンの美容室の閉鎖が世界的に報道されたり、ポーティスヘッドのベス・ギボンズがアフガニスタンの少女たちと演奏したり、少しずつ注目が集まってきておりますが、日本でも多くの方に関心を持って戴きたいと思います。

そして文学の想像力についてということですが、平和な日本では想像できないほど、本当にアフガニスタンが悲惨な状況であるわけですが、例えばもし私がタリバンの家に生まれて、幼いころから親たちの価値観を信じて育ち、タリバンとして生きていたらどうだったろうか、その私は何をどうすれば生き方が変わるのか…そうした想像力が問題の本質に届く文学の可能性ではないかと考えさせられております。森達也監督の福田村事件の映画で、惨殺を行った村人たちは普通の人たちであった。普通の人たちがこんなに残酷なことをするのか…、という視点からのテーマも扱われています。壁を隔てた両側の価値観、行動の背景、その深い領域まで想像力の根を豊かに這わせ、人類の魂の奥底の幽かな声に耳を傾ける、問題が発生した時点とは別の視点に詩や文学の仕事が届きます。

詩の創作には、社会の状況を書いたり、批判するという素晴らしい作品もある一方、一見それとは関係ないような内側、内面へ降りていくことで、逆に社会と関われる、という不思議な面もあり、狭義での政治主義や、知識人も社会参加して責任を持てというだけではなく、作家が自分の独自性を掘り下げて、全体へ普遍に迫るのが、サルトルの語るアンガージュマンであり、そこに人類の問題に対峙する際に有効となり得る、可能性があると考えます。詩や文学に関わるということは、そこまで到達できるようなものを書いていかなければならない、というようなことを、今回の取り組みから、また、皆様から学ばせて戴いた思いでございます。

・岡和田晃　岡和田晃と申します。本日はご参集ありがとうございました。今年二月に柴田さんから「ソマイアさんの呼びかけに対してどうしたらよいだろうか」と相談を受けました。そのとき即座に、「受けた方がよい」とお答えしたんです。というのもおそらく日本においてはこういった形の国際的な連帯というのは、ものすごく古臭いサヨク的なもの”だという社会通念が定着していると思うんです。文学で社会を変えることなどできやしないという冷笑主義

ですね、そういうものが日本社会にはびこっている。だったらむしろやったらいいんじゃないか、と話したわけです。私はこういう試みは嫌いじゃないし、大いにやるべきだという具合に、発破をかけたわけですね。

「そもそもアフガニスタンでターリバーンが詩を禁止したという事実はあるのか」という疑義が呈されたと仄聞します。ところが考えてもみてください、例えばいま、ロシアがウクライナに侵攻してますけど、そのロシアに対して「ウクライナに侵攻していますか」と聞いたら、「侵略などしてはいない」と答えるに決まってるわけですね。

文芸評論家という立場から一言申し上げれば、日本ではあらゆる文化が「お稽古事」になってる現状があるんですね。師匠がいて弟子がいて月謝を払い、お互いの利害関係と縁故主義ですべてが成り立ってしまっています。その外部が理解できないからこそ、「ターリバーンが詩を禁止した事実はあるのか」なんて愚問を投げかけてしまうのです。

今回の『詩の檻はない』の参加者の間にはある特定の党派のようなものが見えません。色々な人がモル状というか、セミラティス（網目状交差）的というか、そういう広がりがあって、実際に八歳の女の子すら参加している。『詩の檻はない』が掲げた「文学を通した抵抗」には多様な内実があります。「抵抗」というとある種の暴力性を想起される方もいらっしゃるかもしれませんが、少なくとも暴力とは無縁のものになってるんですね。

日本においては詩人たちが連帯して詩を書くという試みはネガティブに捉えられてきました。なぜなら戦前は――この旭川の「詩壇」も例外ではないのですが――詩人たちは「翼賛詩」を書いていてファシズムに加担していた。「詩」でもって積極的に人を「死」に追いやっていたわけです。戦後には、現代詩人会が一九五四年に『死の灰詩集』というビキニ環礁での水爆実験に反対する詩集を出したことがあったんですが、これに対して鮎川信夫という詩人が強固な批判を行いました。曰く、『死の灰詩集』は、「水爆の出現に象徴される現在の世界文明の背景を立体的に理解しようとせず、うわっつらで抗議やら叫喚の声をあげているだけのものがおおい」と。この批判が妥当かどうかはともかく、鮎川氏は詩人たちの安易な連帯というのは翼賛詩になびくに等しいと思っていました。

さらに、北海道では『北海道＝ヴェトナム詩集』という詩集が一九六五年に発行されています（六八年に二巻目が出版）。これは旭川に縁が深い江原光太という詩人を主導役として生まれた詩集なんです。『北海道＝ヴェトナム詩集』って、タイトル自体面白いですよね。『日本＝ヴェトナム詩集』ではナショナリズムに絡みとられてしまいかねませんから。詩を通してベトナム人民と連帯しようとする姿勢は画期的でした。でもこの詩集自体も実は出た当初から内部及び外部から批判があったんです。千葉宣一という人は「ヒューマニズムとセンチメンタリズムとは決定的に違う」と述べてベトナムに情緒的に連帯をしようとしているんじゃないかと批判しています。戸沼礼二という人は「野たれ死ぬにはあきらめが悪く、生きるには覚悟がなさすぎる日常の産物」だとし、詩でなく散文として批判文を寄稿しました。『北海道＝ヴェトナム詩集』をめぐってはとりわけ同時代にアンビバレントな評価がなされたわけです。私は「現代詩手帖」の二〇一七年八月号に寄せた「江原光太と〈詩人のデモ行進〉」という批評でこの問題を論じ、自著の『反ヘイト・反新自由主義の批評精神』（二〇一八年）に収めましたが、そこで

は『北海道＝ヴェトナム詩集』に入っている詩の中にはエスペラント語に翻訳されて実際にベトナムに伝わっている詩もあったことを紹介しました。

一方、真壁仁という詩人がいまして『詩の中にめざめる日本』（一九六六年）という岩波新書の有名なアンソロジーがあって、この前復刻されたんですけれども、そちらには江原光太と縁が深かった詩人・薩川益明の作品「自由について」が収められています。この作品で詠われるのは、アメリカが押し付けてくる「鮫の住む海を越えて来る重装備した《自由》（ルビ・フリーダム、以下同）／他国の緑をうなだれた褐色に染め上げる《自由》／ガスマスクをつけた息苦しい《自由》」なのですが、それを拒否してヴェトナムと「火傷の痛みに耐えている／ぼくの自由よ」という慨嘆を交錯させた点を真壁は評価したのです。アメリカに対する上辺だけの侵略批判でなく、アメリカのいう自由の内実を読者に問いかけたわけです。ここでの「ヴェトナム」に例えば「アフガニスタン」や「シリア」といった多様な地名を当て込むことは難しくないと、私は先述した自分の批評文を結んでいます。つまり、9.11同時多発テロとアメリカの報復戦争の文脈をも視野に入れつつ、それらの思考を今後の課題としていました。『詩の檻はない』に私が参加したのはそういう文脈によります。

ここから、今回の詩集が「翼賛詩」に見られる情緒的な連帯を超えているのかどうかという問いが浮上してくると思うんですね。「日本」の国内での利害や縁故主義、同質性を確認して情緒的に連帯する類のものとは異質な連帯のあり方があるのは間違いないが、ではどうしたらそれを説明できるのか。インド出身の文芸批評家でG・C・スピヴァクという人がいまして、この人がプラネタリティ、つまり惑星思考という枠組みを提唱しているのがヒントになると思います。世界をヴァーチャルに一元化しようとする「グローバル」な姿勢はもう耐用限界に達しており、別種の観点から「人種」や国境を超えた「惑星思考（プラネタリティ）」が求められるというのがスピヴァクの主張です。いま、世界はインターネットで一瞬にしてつながっています。経済も一元化されている。すべての文学や言葉が経済的な指標によって収奪されています。そうした「グローバル」な状況が所与のものになっている。そもそも今回の詩集も、海外作品は英語から訳しています。そういう意味で、「英語帝国主義ではないか」という批判もしようと思えば成り立つわけですが、それでも私は、ここに「惑星思考（プラネタリティ）」の実践を汲み取りたい。

先ほど、柴田さんが「アンガージュマン」とおっしゃりました。簡単に言えば「社会参加」という意味です。サルトルの議論を受けたクロード・シモンは「作家のアンガージュマンは表現そのものに宿る」という趣旨の問題提起を行いました。一九六〇年代のことです。「政治参加」と「表現」は、絶えざる緊張の間にあるわけです。そもそもターリバーン政権だけでなくターリバーンの前に政権を敷いていたガニー政権というものを、ソマイアさんは詩でもって強く批判しています。彼女はガニー元大統領がカーブルから逃亡した直後「ガニーを逮捕せよ」という詩を書いており、日本語版は「ウエッブ・アフガン」で読めます。要するにガニーはダメだが、ターリーバンはもっとダメ。つまり、ひとつのイデオロギーに立脚しているわけではないのです。そういった状況を生み出したのは、もとをたどれば9.11以降のアメリカなんですね。日本は実質的にアメリカの属国です。にもかかわらず、「日本は平和だ」という人たちが

います。私は全く平和だなんて思わない。「世界内戦」という観点で現状を認識しています。

・二条千河　こんにちは、二条と申します。私はわりと昔から、「勇気あるよね」とか「大した度胸だよね」みたいなことをよく言われるんですけど――あ、これ褒め言葉じゃないんだな、と最近ようやく気づいたんですが――詩を書いていても、「こういう詩を発表するって勇気ありますよね」という感想を戴くことが結構あるんです。でも、その「勇気」って何なのだろうと。少なくとも現代日本の、私が生活している世界の中では、私ごときがどんな詩を書いてどこに発表しても、国家から逮捕されることも処罰されることもなければ、道を歩いていて石を投げられることもない。せいぜいごく狭いコミュニティの中でちょっと嫌われるぐらいなもので、正直そんなに恐るべき出来事は起こらないんですよね。それなのに、勇気が要るというふうに思われるのはなぜなのだろう。というのは、やはり、そうは言っても詩だとか言葉というものには、場合によっては何か大それた出来事を引き起こすような、決定的に何かを変えてしまうような、そういう力があるんじゃないかとどこかで信じていて、だからこそ勇気なり覚悟なりというものが必要になってくるのかなと思います。ただその力を実感する機会というのは、なかなか無くて。今回、世界中から詩が集まって、一つの形になっていく過程を目の当たりにする中で、ああ、やっぱり詩っていうのは、ムーブメントを起こす力があるんだなと。それを、三十年近く詩を書いてきて初めてちゃんと実感できたような気がします。そういう意味で貴重な現場に立ち会わせて頂けていることに、私はとても感謝しております。

・木暮純　まずはおめでとうございます。私も、先ほど二条さんが言われたように、発行までの過程を目の当たりにして、本当に柴田さんはじめ皆さん、大変なことだったですね。ここまで来るのは。私は今回、この作品集に作品は出せませんでしたけれども、校閲というかたちでほんの少しお手伝いをさせて頂きました。皆さんの作品とか、想いを共有していくうちに、いかに自分が無知だったかと、アフガニスタンの状況に関して。そしてペルシア詩のことについても、オマル・ハイヤームの『ルバイヤート』とか、そのあたりで止まっていたという、あとは井筒俊彦さんの書いたものでイスラム世界を知っていたという、そういう程度なんですね。イスラムのことに関しては本当に知らなくて、お恥ずかしい思いをしております。後で朗読のほうで、アフガニスタンの人たちと、心を合わせて、と言ったら軽いんですけれど、現地へ行く術も無いですし、この場で想いを伝えたいと思っております。また、政治と宗教という観点から一言申しますと、アフガニスタンにおけるタリバンの話、翻って、この日本、この地ではどうなのか。去年あたりから露わになってきましたけれど、私は以前から聞き及んでいた事態について、決して風化させてはいけない。我々の生活に関わってくることですので、本当に何と言ったらいいのか、良くない傾向だと思うのです。最後に、今日はまちなかぶんか小屋十周年ということで、本当におめでとうございます。じつはここは私の再生の場所なんですね。この場所がなかったら私は朗読もしていませんし、違った風になって、ぼろぼろぼろと転がり落ちていたかもしれません。この場所に、そ

して皆さんに感謝を致しまして終わりたいと思います。

・谷口雅彦　この表紙の写真について、いきさつ、エピソードをお話させて戴きます。この写真はですね、二〇一九年、僕はいま旭川と神奈川の湘南と二拠点で行き来して、仕事をしているんですけれど、これは神奈川の湘南の海なんですね。二〇一九年に撮影しました。江ノ島水族館の中で…僕はフリーパスを持っていて、家から十分もしない近くなのでよく行き、クラゲの水槽を見て何か閃いたりしながらまた仕事を繰り返す中で、ちょうど大きなガラスの向こうに波が見えて、それは普通の、日常的なことですが、この時、急に何故か一枚写真を撮りたくなって、撮ったんです。そのまま持ち帰って、ある程度データがまとまるとパソコンで見たらこんな写真があって、これは写真全体の半分くらいのもので天地を切ったのですね。何故かと言うと、僕のFacebook のヘッダーにコロナ中、ずっとあったんですね。家族が手を繋いでいたり、穏やかな感じの写真だと思っていたら、今回、柴田さんからこの話を頂いて、どの写真が一番ふさわしいのかな、と。僕が撮った写真の中で何があるかなと考えたときに、あれ、もしかしてこれが良いかもしれない、と一応提案しました。そのときに思ったのは、写真でこの中を決定づける、誘導するものは何か、もう一つは写真によってぼやかすことになってはいけないということでした。これがもしかしたらふさわしいのではないかと柴田さんに提案し、ソマイアさんのほうから一回どうなの?という話があったのですよね。

柴田　「私たちの物語にこの写真は合うの?」という問い合わせをソマイアさんから戴きました。それに対し私は、日本は海に囲まれている。日本にとって海は国境であり、海は恩恵をもたらすものでもあるけれど、檻のようでもある。あなたのメッセージは海を越えてきた。あなたのメッセージが波の輪のように広がっていけばいいですし、檻を破れたらいい、ということを返答しました。すると「じゃあこれにしよう」「素晴らしい写真をありがとう」という返答を戴きました。ありがとうございます。

谷口　そのやりとりの英文と日本語訳を（笑）、片言の日本語訳を送ってくれて、こう説明しました、と僕に送ってくれました。同時にその頃、この写真をよく見たら、左側に兵士のような感じの人が立っているのが見えて、家族の下に兵士がいて、逃げるような人がいて、孤独になる人がいて…っていう感じの凄い風景。波がやってくる様子も何か暗示みたいな気がして、今となってはこれは何だったのだろう?と思います。世界の詩人がこういう抗議をこれだけ決意して行動したことに敬意を表しますし、高い感受性で皆さんがこうやって活動を日々されているんだということを今回知ることができました。ありがとうございました。

・日野あかね　はじめまして。漫画家の日野あかねと申します。最近、旭川の詩人や作家についての絵を描いたりとかして、にぎやかにさせております。今回、詩集に参加させて戴くことになりまして、本当に光栄に思っております。はじめ、私の絵は本当に漫画なので、ちょっとイメージと違うんじゃないかと思ったんですけれど、逆に、日本と言えば漫画というポップカルチャーが

あるという風に思ってくださっている世界の方もいるということで、それでちょっと許してもらおうかなと思いまして、いつもの絵で描きました。そしたらソマイアさんもとっても気に入ってくださって、Facebook に上げてくださったりして、ちょっとホッとしております。今回私が出来ることは絵を描くことだけなんですけれど、先月偶然、アフガニスタンで命を落とした中村哲さんのブログを発見しまして、その中に詩のことが書かれていましたので、ちょっとお話したいと思います。このブログは二〇一九年九月、亡くなったのは十二月なので、その三か月前に書かれたものなんです。その内容というのは、「アフガン人は花を愛し、詩を愛する。詩会では季節の花をテーマに詩人たちが集い、即興詩を吟ずる。詩人は昔からどこにでもいて、無名の農民から王侯貴族まで、身分国籍を問わず集まってくる。完全に口承文学で、読み書きのできぬ有名詩人までいるんのだ。」…この次のブログの掲載は二〇一九年十二月になります、と書かれていました。でもそのブログが掲載されることはなく、十二月四日に銃殺されてしまいました。これが最後だと思うと、アフガニスタンと詩というものが余計に、凄く強いものなんだな、と実感しました。おまけにこの一か月後に、彼はアフガニスタンで名誉市民に選ばれているんですよね。だから余計何かタリバンを刺激するような感じがあったのかなって、ちょっと考えちゃいました。弾圧されるまで詩は大きいものなんだ、ということが今回分かって、こういうこと書いたから余計駄目だったのかなって、ちょっと感じちゃいましたね。私は詩人じゃないので、こういうニュースやブログなどを見て話を妄想するのが得意な人種なのです。漫画家なので。今後も関わり方は変わってくると思うんですけれど、こういう会に参加させてもらって、自分なりに考えたことを発表していきたいと思っております。今回はありがとうございました。

・野口壽一　今日は受け入れて戴いてありがとうございます。こんなに質の高い…ムーブメントって仰いましたけれど、詩の持つ力、それを発揮されたということは、日本の文学運動…ここは小熊秀雄のゆかりの地ですから、僕がどうこう言うまでもなく、文学の力をご存じの方がたくさんいらっしゃると思うんですけれど、日本はそういうのを忘れたんじゃないかと思うんです。僕は大学紛争のときに大学に入りまして、十八、十九歳のときに影響を受けて、大学の教授、世の中もすべておかしいな、と。ちょうどベトナム戦争のときですから、戦争反対！と飛び込みまして、大学入る前は小説家になりたくてですね、詩では萩原朔太郎に陶酔したりして、文学をやっている場合じゃない、革命をやらなければと単純に思いまして、それでずーっと突っ走ってきたんですね。日本じゃもう革命なんて体験することはできないから、ベトナムは勝ったし、次は、と思ったらアフガニスタンというところでソ連が入ってむちゃくちゃやっている、とマスコミが報じました。しかし色々調べたりしていると、農民や労働者、土地を耕すために額に汗する者が権力を持たなければならない、と言っている人たちをソ連が応援しようとしているのは分かったんですが、ソ連の軍事力を利用する人たちと、アメリカの軍事力を利用する人たちの代理戦争のようになっていました。色んなことが分かって人生観が変わりました。初心は忘れませんでしたが、アフガニスタンの革命は難しくなり、水俣の映画を撮った土本典昭監督と『よみがえれ カレーズ』という日本アフ

ガニスタン合作映画を撮った時の助監督で『笹の墓標』という映画を撮った藤本幸久さんらと色々な活動を細々と続けておりました。

アフガニスタンはアメリカが入って民主化するということになり、そのとき僕らは昔からアフガニスタンと付き合っているから手伝ってくれと言われましたが、アメリカの手伝いをする日本人はいくらでもいますので、お断りし、何故アフガニスタンが失敗したのかを研究していました。ＮＡＴＯ軍が撤退することとなり、アフガニスタンの人たちがどうなるのか、観察しよう。色んな意見を集めてプラットホームを作ろう、という風に思い、ウエッブ・アフガンを二〇二一年の四月に初めました。するとタリバンはアフガニスタンを暴力的に支配することとなり、ソマイア・ラミシュさんがヘラートからオランダへ亡命し、オランダの亡命者のグループが彼女を迎え入れ、その情報が私に届きました。

彼女がペルシャ語で「ガニーを逮捕せよ！」という詩を書いてアフガンに流したのですが、それをＡＩなどを使って翻訳し、「ウエッブ・アフガン仮訳」ということで掲載しました。すると様々な反応があり、詩の力を再確認しました。ソマイアさんがプラカードを掲げている写真は、女性たちの教育のプラカードです。今年二月、詩でターリバーンに抗議しようというソマイアさんのメッセージを日本の詩団体十数箇所に送りました。すると北海道詩人協会の柴田さんから「これは本当なのですか？」と返信がありました。本当ですと答えましたが、柴田さんはそれを鵜呑みにするのではなく、自分で調べ始めました。ウエッブ・アフガンがきっかけで調べ始めてくれたことが嬉しかったです。旭川からロッテルダムへ、ロッテルダムから旭川へ、柴田さんがソマイアさんのメッセージを拡散し、詩人たちへ呼びかける過程をウエッブ・アフガンに掲載しました。風化した日本の文学の連帯の活動がここで蘇ってきたように感じました。

旭川は…日本と言うより旭川ですよね。一五〇年前、二〇〇年前の北海道にはアフガニスタンのような歴史体験が蓄積されているんじゃないかと思います。そういうことを踏まえて発信されているというのを僕としては世界の人たちに向けて発信していきたいと思います。

最後にお伝えしたいのですが、この本に参加しているＳ・Ｋさんという方は二〇二一年八月まで日本大使館で働いていたアフガニスタンの女性です。彼女はドバイを経て日本に来ました。ある程度日本政府は面倒を見て、その間日本語の勉強をしたり、その過程で僕も知り合って、ソマイアさんのメッセージを見せたら、日本語の勉強のノートを見せてくれまして、そこにあの詩が書いてありました。これは詩だ！と僕は思い、柴田さんに送り、掲載して頂きました。危険なので匿名で出して良かったと思います。彼女は自分の詩が活字になるとは思っていなかったので、凄く喜んで「もっと日本語を勉強します」「詩を書き続けます」と言っています。僕も老骨に鞭を打ち、「フラジャイル」という集団を知ったので、もう一回、拙劣ながら詩をやっていこうと思っているところです。どうもありがとうございました。

『NO JAIL CAN CONFINE YOUR POEM　詩の檻はない』
2023年 8月～12月

8 月 14 日　amazon の詩集の新着ランキングで『詩の檻はない』ついに第 1 位！
8 月 14 日　メディアあさひかわに記事掲載
8 月 15 日　『詩の檻はない』ついに発行！　ペルシャ語版の BBC、インデペンデント紙でも報道される
8 月 16 日　長崎新聞に記事掲載
8 月 21 日　北海道新聞に記事掲載
8 月 24 日　「世界のどの地域も夜」旭川まちなかぶんか小屋にて開催。『詩の檻はない』発行記念イベント
8 月 29 日　桜井真樹子さんのブログにて『詩の檻はない』ご紹介戴く
9 月 1 日　『コールサック』115 号　植松晃一さんの詩誌評に、詩誌「フラジャイル」第 17 号、
ソマイア・ラミシュさんからのメッセージ、『詩の檻はない』のことをご紹介戴きました
9 月 5 日　詩人キャロル・カルシロ・メスロビアンさんによるインタビュー 【自由を求める声：ソマイア・ラミシュ】
9 月 16 日　三浦綾子記念文学館　旭川の詩の歴史（過去・現在・未来）の講演　講師：柴田望
『詩の檻はない』の活動についても紹介し、10 月には旭川ケーブルテレビにて放映
9 月 17 日　裏小樽モンパルナスにて、「小樽詩話会60周年記念・裏小樽モンパルナスの詩人たち」
『詩の檻はない』についてスピーチと朗読（柴田望）
9 月 25 日　日本ペンクラブ獄中作家・人権委員会声明 「アフガニスタンの詩作禁止令に対する
ソマイア・ラミシュさんの『詩の檻はない』出版によせて」
9 月 25 日　ウエッブ・アフガンにインタビュー掲載：詩の持つ力を信じて～岡和田晃さんに聞く～
9 月 27 日　秋田魁新報に記事掲載（共同通信・細川航記者）
9 月 30 日　日本詩人クラブ「詩界通信」104、〈地域からの声・北海道篇〉（村田譲さん）
『詩の檻はない』発行の経緯等についてご紹介戴きました
10 月 1 日　『詩と思想』10 月号（土曜美術社出版販売）
《艀船を泊めて》～アフガニスタンにおける検閲と芸術の弾圧に対する詩的抗議（柴田望）
10 月 6 日　朝日新聞デジタルに掲載！（ドットワールド玉懸光枝編集長の記事）
「詩作禁止令」に抗議　アフガニスタンへの連帯で詩集が生まれるまで」
10 月 14 日「よりみち＋」（No.132、発行・共育舎）《牧場の本棚》に紹介戴く
10 月 15 日『詩の檻はない』朗読会～横浜・寿からアフガニスタンへ、世界へ
～　横浜ことぶき協働スペースで行われた「詩の檻はない」朗読会、大盛況のうちに終演。
本イベントにて、アフガニスタン地震救援金として 39,500 円（約 251 ユーロ）が集まり、
アフガニスタン地震救援基金へ寄付
10 月 15 日　札幌で北海道ポーランド文化協会第 37 回定例総会&第 12 回朗読会「午後のポエジア」
『詩の檻はない』について安藤厚先生のスピーチ、詩人・朗読家による作品朗読
10 月 15 日　Yahoo!ニュースに掲載　～タリバンの詩作禁止に抗議の詩
横浜で朗読会「私たちは決して黙らない」～
10 月 21 日『Nulle prison n'enfermera ton poème』 フランス語版出版発表（Oxybia 社）
10 月 22 日　Yahoo!ニュースに掲載 「芸術が破壊され、詩作も禁じられ.....」
アフガン詩人の訴えに連帯　世界に先駆けて日本で詩集が生まれるまで…
10 月 22 日　神戸新聞に記事掲載
10 月 31 日　しんぶん赤旗、勝嶋啓太さんの書評《詩壇》で紹介される
11 月 14 日　J-WAVE のラジオ番組 JAM THE PLANET(PART2)にて、『詩の檻はない』について、
朝日新聞 with Planet 副編集長木村文さんが玉懸光枝さんの記事をご紹介
11 月 18 日　旭川文学資料館にて「安部公房と旭川」展の講演（柴田望）で『詩の檻はない』を紹介
→同展示と講演について 12 月1日旭川ケーブルテレビ「ポテトにこんにちは」に柴田出演
11 月 28 日『現代詩手帖』12 月号・海外詩紹介　夏野雨氏の評で『詩の檻はない』をご紹介戴きました
12 月 16 日　KOTOBASlamJapan 2023 全国大会　ゲスト ： ソマイア・ラミシュ
12 月 17 日　KOTOBASlamJapan 主催　ソマイア・ラミシュさんとの交流会　松戸 FANCLUB
12 月 19 日　横浜ことぶき協働スペースにてソマイア・ラミシュさんとの交流会
岡和田晃さん、大田美和さん、佐川亜紀さんとの対談。